

解説

百原 新¹: ポーランド科学アカデミー・シャフェル植物学研究所の研究活動
 Arata Momohara¹: Władysław Szafer Institute of Botany, Polish Academy of Sciences

シャフェル研究所はポーランドの古都クラクフ Kraków の中心部に位置する。この研究所は、1953年にヤギェウウォ大学 Jagiellonian University 教授ヴワディスワフ・シャフェル Władysław Szafer (1886–1970) 博士の主導のもとに、最初はポーランド科学アカデミーの植物学研究部として1953年に設立された。その後、1956年に「植物学研究所」になり、1986年にシャフェル教授にちなんで、現在の名前がつけられた。シャフェルは植物分類・地理学者であり、大型植物化石と花粉化石を使って新第三紀以降のポーランドの植生史を精力的に研究した。その経緯があって、この研究所はポーランドにおける古植物学、植物地理学、植物分類学、植物生態学の中心的役割を担っている。研究所の各研究部の構成と現役研究者の人数は、生態学研究部 (9名)、古植物研究部 (10名)、維管束植物分類研究部 (10名)、コケ植物研究部 (2名)、藻類研究部 (2名)、菌類研究部 (3名)、地衣類研究部 (3名) である。研究所の建物の一部には、ヤギェウウォ大学の植物学研究所の研究室があり、大学との共同研究が盛んに行われている。

シャフェル研究所の建物の1階はポーランドの古生代から現世までの植生史・植物相変遷史を展示・解説した博物館になっている。この博物館は、2003年10月に開催された研究所の50周年記念式典にあわせて、リニューアル・オープンした。すなわち、この博物館の展示は、古植物学部門を中心としたこの研究所の過去50年間の研究成果を表現したものである。古生代から現世までの植物相と植生の変遷が、植物化石と景観復元の絵の両方を使ってわかりやすく解説されている。大部分の化石の標本に対応させて現生分類群の標本とそれらの現在の分布図が並べて展示されているので、第三紀以降の北半球の植物地理変遷が理解しやすく、ほとんどの植物が中部ヨーロッパに現在分布しないことがよくわかる。残念ながら、解説パネルはすべてポーランド語である。

古植物学研究部の研究は、後期更新世以降の花粉分析 (Emeritus Prof. M. Ralska-Jasiewiczowa, Dr. D. Nalepka, Dr. A. Wacnik, MSc. R. Stachowicz-Rybka), 考古遺跡の大型植物遺体 (Emeritus Prof. K. Wasylkowa, Dr. A. Bieniek, MSc. E. Madeyska), 後期更新世以降の泥炭発達過程 (Prof. A. Obidowicz), 第四紀花粉・大型植物化石フロラ (Emeritus Prof. K. Mamakowa), 第三紀花粉フ



図1 シャフェル研究所の建物。



図2 研究所入口に掲げられているシャフェル博士の記念プレート。

ロラ (Emeritus Prof. L. Stuchlik, Dr. E. Worobiec), 第三紀葉化石フロラ (Prof. E. Zastawniak, Dr. G. Worobiec), 第三紀種子・果実化石フロラ (MSc. M. Lesiak), 中世代古植物学 (Dr. J. Ziaja, MSc. E. Wcisło-Luraniec) である。かつてシャフェルらが取り組んでいた第四紀前半は手薄であるが、第三紀以降の古植物学の大部分の領域がカバーされている。中・古生代古植物学は、ヤギェウウォ大学植物学研究所で盛んである。このほか、維管束植物分類学研究部の Dr. J. Wóicicki が、化石と現世植物の両方の資料に基づいたヒシ科の系統分類学の研究を行っている。

古植物学研究部の現役研究者は 10 人であるが、名誉教授にも個室が与えられ、多くのファンドを取得してくるので、現役研究者を凌ぐほど活発に研究を続けている。名誉教授もファンドが申請でき、技術者も 5 人おり、花粉の抽出作業や大型植物化石の水洗篩分け作業などは、主に技術者の仕事である。研究所には、海外の研究者が共同研究や標本調査のために頻繁に訪問している。短期や長期滞在の研究者のための宿泊施設も建物の中にある。

古植物学研究部が主催した国際研究集会は、1961 年の INQUA (国際第四紀学連合) 第 6 回大会以降、現在まで 9 回開催されている。近年では 1997 年に European Lake Drilling Program の第 2 回ワークショップが、1998 年に第 5 回ヨーロッパ古植物学・花粉学会議が行われた。

図書室にはシャフェル教授の蔵書を中心に、植物分類・地理、および植生史関係の雑誌や文献が充実している。定

期刊行物の交換によって世界各地の研究紀要を収集しており、旧ソ連や東欧圏の雑誌や文献は比較的よく揃っている。図書室の閲覧システムは日本とは違い、書庫には司書以外は立ち入れず、カードで検索した上で請求して借り出しを行う。共産主義時代の名残なのか、あまりコピーをとらないで借りだした図書を研究者の各自の居室にそのまま所蔵することが多い。

研究所には出版部が置かれており、3 人の専門職員が編集等に従事している。出版部からは、フロラ、アトラス、モノグラフなどの単行本や定期行物が、毎年多数出版されている。定期行物のうち、Acta Palaeobotanica は古植物学研究部が中心になって編集を行っている国際誌である。第 1 巻は 1960 年に刊行され、毎年 1 巻 2 号が刊行されている。刊行開始当初は英語要約つきのポーランド語の論文が多かったが、1993 年以降は英文だけになり、編集委員にも国外の研究者が多く含まれている。研究所の情報は、英文のホームページ <http://bobas.ib-pan.krakow.pl/Instytut/english.htm> から得ることができる。次号では、研究所での標本整理について紹介する。

(〒 271-810 千葉県松戸市松戸 648 千葉大学園芸学部緑地・環境学科 Department of Environmental Science, Faculty of Horticulture, Chiba University, Matsudo 648, Chiba 271-850, Japan)

(2004 年 6 月 9 日受理)